

博士（栄養学）学位論文要旨

食を題材とする国際交流を取り入れた
外国語活動の実践と検証

Implementation and Assessment of Foreign Language Activities Classes
Incorporating Food-themed International Exchange
to Deliver *Shokuiku* (Food and Nutrition Education)

2014 年

指導教員 武藤志真子 教授

1102002

神田 聖子

KANDA, Seiko

女子栄養大学

【背景及び目的】2008 年に告示された小学校学習指導要領において、「学校における食育の推進」が位置づけられた。同時に英語を原則とする外国語活動が新設され、2011 年 4 月より第 5・6 学年で実施されている。目標はコミュニケーション能力の素地を養うことであり、内容には「異なる文化をもつ人々との交流を体験し、文化等に対する理解を深めること」も含まれている。外国語活動の教材である『Hi, friends!』では文化の重要な側面であり、日常の体験とも結びつく果物等食べ物が題材として取りあげられている。一方、食育に関しては『食に関する指導の手引』が公表されており、本手引には「各教科等における食に関する指導の展開」と題し、複数の教科・教育活動による学習内容が例示されている。しかし、外国語活動の学習内容は記載されておらず、食育と外国語活動を連携させた研究報告も少ない。そこで本研究では、「食を題材とする国際交流を取り入れた外国語活動」を 3 年間実施し、学習効果を検討することを目的とした。通信システムには Skype™ を用い、交流校として大韓民国の小学校の協力を得た。

【第 1 章】食を題材とする英語を用いた国際交流の学習効果

【方法】対象者は 2011 年に G 県 G 小学校第 6 学年に在籍する 120 名であり、調査は事前・交流前・交流後調査の 3 回行なった。1 クラスを「交流群」、2 クラスを「非交流群」に割り付け、両群とも事前—交流前調査間に 3 回の Shokuiku を実施した。その後、交流群のみ 1 回の国際交流に参加した。3 回の調査間における質問紙による回答の変化を Wilcoxon の符号付順位和検定を用いて比較検討し、有意水準は 5%未満とした。調査内容は食と英語・コミュニケーションに関する興味・重要性・学習意欲、態度、自己効力、行動及び食と英語の両要素を含む知識である。また、交流群のみ韓国の食事・習慣に関する項目を加えた。

【結果と考察】 事前－交流前調査間に両群で同じ Shokuiku を受けているにもかかわらず結果は異なっていた。交流群は事前調査に比べて交流前に食の学習への興味と学習意欲が有意に高まり、同時に栄養バランスの態度、行動も有意に良好な変化を示した。しかし、非交流群は事前－交流前調査間の変化はなかった。英語・コミュニケーションへの学習については国際交流前後で有効性を明らかにできなかった。以上より、食を題材とする外国語活動は、国際交流が学習への動機づけとなり食の学習に有効であることが示唆された。

【第 2 章】異文化受容に着目した食を題材とする外国語活動の学習効果

【方法】 第 1 章と同じ G 小学校で 2012 年に第 6 学年に在籍する 120 名を対象とし、同様に交流群と非交流群に分けた。調査は事前・交流 3 週間後の事後・2.5 ヶ月後の追跡調査の 3 回とした。両群とも事前－事後調査の間に両国の共通である「主食、菓子、学校給食」を教材とした 3 回の Shokuiku を受け、その後、交流群のみ 1 回の国際交流に参加した。菓子を教材とした Shokuiku では、韓国菓子の試食を含め、味覚用語について学んだ。3 回の調査内容は①食への関心・重要性、②韓国の食文化に関する異文化受容、③外国語に関する異文化受容であり、3 回の調査間における上記①、②、③の変化を比較検討した。

【結果と考察】 交流群では 3 回の事前 shokuiku で教材とした食べ物については、中期的な評価においても食べる意欲が高まっていた。試食体験を取り入れた韓国菓子への食べる意欲は、国際交流の実施有無にかかわらず、追跡調査では両群で食べる意欲が有意に定着していた。また、味覚用語を英語で話す自信にもつながることを確認した。外国の食を題材とする外国語活動は、交流群のみでなく非交流群も学習内容を理解し、異文化を受容していたが、交流群の方が中期間の定着がみられた。以上

より、外国の食を題材とする外国語活動は、必ずしも国際交流を実施しなくとも異文化の受容を促すことが示された。

【第3章】国際交流の再参加意向に関する影響要因の検討

【方法】2013年に第1、2章と同じG小学校の第6学年に在籍し国際交流に参加した児童40名を対象とした。調査は事前・事後調査とし、児童はこの間に3回のShokuikuと1回の国際交流に参加した。事前調査では属性について、事後調査では食と英語学習の観点から再参加の影響要因について調査した。事後調査時の再参加意向の「高群」及び「低群」を外的基準とし、説明変数を①対象者特性、②食の学習、③英語の学習、④英語コミュニケーションの4側面につき林氏の数量化Ⅱ類により解析した。

【結果と考察】国際交流の再参加の意向が高い児童は、①本プログラム以前に国際交流の参加経験があり、②英語を進んで話すことができる児童であった。特に英語を話せる自信の影響が強かった。以上より、第5学年、第6学年での継続的な国際交流の実施と、「英語を話せる自信」に重点を置いたShokuikuプログラムの立案が必要であると考ええる。

【結論】食を題材とする外国語活動は、食への学習に有効であることが明らかとなった。これは、時間割に存在せず複数の教科や教育活動で実施されている食育を、外国語活動にても実施する新たな食育の展開例を示すものである。